



最近では世界のエキスパートが使うプリエンプティブオープンが大きく変わってきています。プリエンプティブビッドについては過去何回か話題にしました (第 30 回、第 83 回、第 84 回) このプリエンプティブビッドの新しい潮流を何回かに渡って解説してみましよう。これをうまく使うと、下級者が上級者を打ち負かす非常に有効な方法になります。

まず昔とどう変わってきたのかから解説してみましよう。

1 番典型的なプリエンプティブビッドは、3 レベル以上のオープンです。歴史的に見ると 1920 ~ 1930 年代のブリッジ界を代表するアメリカのカルバートソンは、バルで

♠6♥KQJ8743♦J1095♣6

♠6♥54♦KQJ1063♣QJ104

ノンバルで

♠1096♥2♦K6♣KQ108632

♠J9865432♥93♦-♣Q83

を 3 オープンの例に挙げています。

次に 1940 ~ 1950 年代を代表するアメリカのゴーレンは

♠KQJxxxx♥x♦xx♣xx

をノンバルは 4 S、バルは 3 S の例に挙げています。

一方ヨーロッパ側で 1960 年代を代表するイギリスのリースは

♠85♥KQ109853♦6♣1064

を 3 H、サードハンドで

♠63♥102♦AQJ962♣KQ8

を 3 D とオープンすると言っています。

これらは、ボイドやシングルトンと向かい合ってもトリックが取れるような長さがあるスートであること、ルーザーの数がルール・オブ・2 アンド 3 (=ルール・オブ・500) にほぼ縛られたものでした。そのほかにメジャーが 4 枚あってはいけない、日本においては今もほぼこのスタイルが主流です。

しかし 1980 年代から 1990 年代に掛けて世界のエキスパートの間では過激化が進みます。もっと少ない枚数での 3 オープンです。これはパートナーには 3 枚サポートがあるという前提をしているということです。トータルトリック法則からトランプの枚数分までのレベルまでビッドしても良いという考えです。だから 6 枚スートがあれば 6+3=9 トリック、つまり 3 レベルまでビッドして引き合う、だから先取りして (=プリエンプティブ) ビッドしようとするようになったのです。

この新しい考え方を代表するイギリスのロブソンは 1990 年代に記述した本で解説しています。その本の中で、極端な例としてノンバル対バルのサードハンドで

♠QJ53♥4♦QJ1095♣1062

を 3 D オープンした話をしています。同じ本の中で

♠AJ5♥Q4♦KQ107543♣6

♠J7♥62♦KQ108753♣42

♠QJ95♥62♦AQJ973♣6

♠10973♥42♦KQ10953♣4

は適切な状況では皆 3 D オープンすることを勧めています。これがルールオブ 800 とか 1100、1400 極端には 2000 などになっていきました。この新しく発展し始めたプリエンプティブビッドでは重要な要素が 4 つあります。① ODR ②バルネラビリティ③ポジション④パートナーシップです。以下順を追って説明します。

① ODR とは Offense to Defence Ratio の略で、ハンドがオフェンス向きかディフェンス向きかを比較して評価します。♠QJ1098653♥AQ43♦-♣K74 のようなハンドは明らかにオフェンス向きで、都合良いところにパートナーが絵札とショートスーツがあれば 6 S も夢ではありません。逆に ♠KJ9♥AQ43♦QJ7♣K74 のようなハンドはもちろん 1 NT オープンハンドで、パートナーが適切のところに絵札を持っているときオフェンスで強さがありますが、ディフェンスをしても少なからず取れそうな絵札を全スーツに渡って持っています。つまりどちらにも向いています。世界的に見て数値として計る方法は確立していませんが、1 つ言えることは前者のハンドではスペードの QJ はディフェンスの時には役に立ちませんのでディフェンスでは 9HCP の価値、代わってオフェンスでは 12HCP の価値と考えられ ODR は 12:9、後者のハンドでは 15HCP はディフェンスにもオフェンスにも同じように役立っていますから ODR は 15:15 といって良さそうです。この ODR が高いほどプリエンプティブに向いているということになります。

②バルネラビリティ=特に重要なのはバルの相対的關係です。自分たちノンバル、相手バルがプリエンプティブビッドをするのに最適な状況で、バルがこの逆の時は最悪な状況です。ボスバル、ボスノンバルのときはこの中間的状況と言えるでしょう。

③ポジション 1st ハンドは、まだ強さが分かっていない人がオポーネントは 2 人、味方は 1 人つまり邪魔する可能性が 2 : 1 でオポーネントの方が多いということになります。3rs ハンドはこれが 0 : 1 ですからプリエンプティブにとってもっとも良いのは 3rd ハンドで、ついで 1st ハンドということになります。これに引き替え 2nd ハンドは 1 : 1 ですのであまり適しているとは言えません。

④パートナーシップ、これは重要で、レベルが上がりすぎないことに注意を払う必要があります。パートナーは特にノンバル対バルで 3 オープンしたときこちらに 3 枚あると仮定したビッドをしていますから、3 枚でレイズをしない方が良いのです (4 枚目からシングルレイズ、5 枚あればダブルレイズをしてよい) また時折現れるバカげた結果をパートナー同志が気にしないメンタリティを持つことが必要です。日本にも NEC カップに来たことのあるイギリスの故 John Armstrong は ♠543♥652♦84♣J7643 を持って 2nd ハンドで 3 C オープンし、パートナーは 16HCP の 3-5-5-0 ハンドで 5 ダウンの -250 だったことがあるようですが、パートナーともちょっと肩をすくめただけだったそうです。(John Armstrong は有名な Wild pre-emptor です)